

第25図 昭和60年度平城京内発掘調査地点図

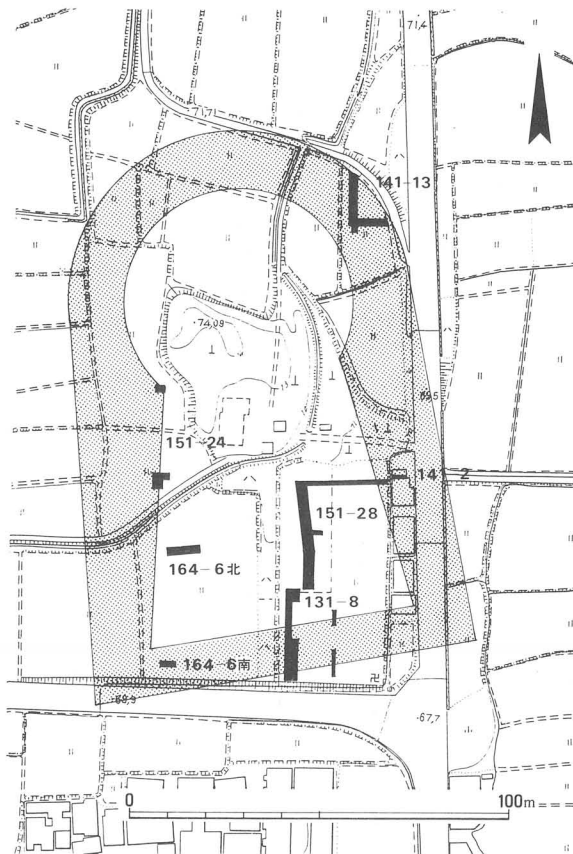
昭和60年度 平城京内発掘調査地一覧

調査次数	調 査 地	面積(m <sup>2</sup> )	調 査 期 間	備 考	発掘担当者	掲載頁	
164- 6	左京一条二坊(木取山古墳)	法華寺町地藏前1130-1	32	85. 7. 1- 7. 5	内山重昭宅	山本 忠尚	64
164-22	左京一条三坊三坪	法華寺町1248	27	86. 2. 3- 2. 5	塚本奈良次郎宅	宮本長二郎	65
164-12	左京二条三坊六坪	法華寺町 189, 191-3	180	85. 9. 26-10. 18	トヨタビスタ	上野 邦一	66
164-11	左京四条二坊三坪	四条大路 1 丁目 8-3	480	85. 8. 20- 8. 29	スリーエムホテル	山岸 常人	67
※164- 8	左京四条四坊八坪	三条宮前町	150	85. 7. 16- 7. 22	白藤学園	松村 恵司	
※166	左京九条三坊十坪	東九条町 418-1 他	2300	85. 4. 22- 7. 25	菱食	田辺 征夫	
※164-25	左京二条六坊十一・ 十三坪	北魚屋西町	600	86. 2. 17- 3. 6	奈良女子大学	金子 裕之	
※164-28	右京一条二坊一坪	佐紀町 9-1	40	86. 2. 28- 3. 4	山崎清宅	寺崎 保広	
164- 7	右京一条二坊八坪	佐紀町 1-1	75	85. 7. 6- 7. 10	城田茂宅	山岸 常人	68
164-30	右京一条二坊八坪	佐紀町 3-2 他	90	86. 3. 17- 3. 20	西里安一宅	寺崎 保広	69
※164- 5	右京一条北辺四坊五坪	西大寺赤田町 1 丁目 835- 他	10	85. 6. 27	河辺産業	毛利光俊彦	
※164-16	右京六条二坊・六条大路	西の京町 390	13	85. 11. 11-11. 13	山本義一宅	綾村 宏	
168	右京八条一坊十三・ 十四坪	大和郡山市九条町 132 他	5600	85. 7. 10- 86. 1. 27	大和郡山市	千田 剛道 杉山 洋	70
※164-10	右京八条一坊十三坪	大和郡山市東奈良口町	72	85. 8. 19- 8. 22	奈良県	千田 剛道	
※164-19	東大寺旧境内	雑司町字横町 176	12. 6	86. 1. 20	秋田信雄宅	金子 裕之	
※164- 4	東大寺西面大垣	今小路町52-1	15	85. 6. 6- 6. 11	芋川隆行宅	松本 修自	
※164- 3	興福寺旧境内	東向中町 5-2	16	85. 4. 15- 4. 17	橋本弘宅	毛利光俊彦	
※164-23	法華寺旧境内	法華寺中町 633	4. 5	85. 2. 6	本田ヤエ宅	宮本長二郎	
※164-15	〃	法華寺中町 648	11	85. 10. 7-10. 8	極楽寺	工楽 善通	
※164-27	〃	〃	10	86. 2. 24- 2. 25	〃	宮本長二郎	
164-24	海竜王寺北辺	法華寺町1210	22. 5	86. 2. 12- 2. 13	塚本健司宅	宮本長二郎	75
164-14	海竜王寺北辺	法華寺北町 905-1	25	85. 10. 1-10. 20	塚本強志宅	工楽 善通	76
次数外	西大寺境内	西大寺町2585	140	85. 9. 13- 9. 21	西大寺防災工事	山岸 常人	77
※次数外	唐招提寺東門	五条町29	13	85. 12. 3-12. 4	唐招提寺	巽 淳一郎	
※164- 2	秋篠寺境内	秋篠矢部内 755-3 他	30	85. 4. 9	秋篠寺	松本 修自	

※は本文に収録せず。巻末「その他の発掘調査一覧」参照。

民家建設に伴う事前調査である。木取山古墳関係の調査としては、昭和56年度の第131 - 8次調査以来、6回目にあたる（『昭和56・57・58年概報』）。

想定される墳丘前方部の西辺部と南西隅部において、各1箇所ずつ小規模な東西トレンチを設けて調査した。北トレンチでは、耕土直下が平坦な地山であり、電柱の掘形以外にはなんらの遺構もなく、この地点が墳丘上にあたることを確認したにとどまる。南トレンチでは、耕土・床土の下に近世の遺物を含む暗褐色砂質土層がある。その下は淡灰褐色混礫粘質土層で、瓦片・埴輪片をふくむ。現地地表下約1mまで掘り進み、ほぼ中央付近で西へ下る段を検出した。東側の高まりは地山と同質の土だがやや軟らかいため、墳丘を削って濠を埋めた奈良時代の整



第26図 木取山古墳発掘遺構図（1：2000）

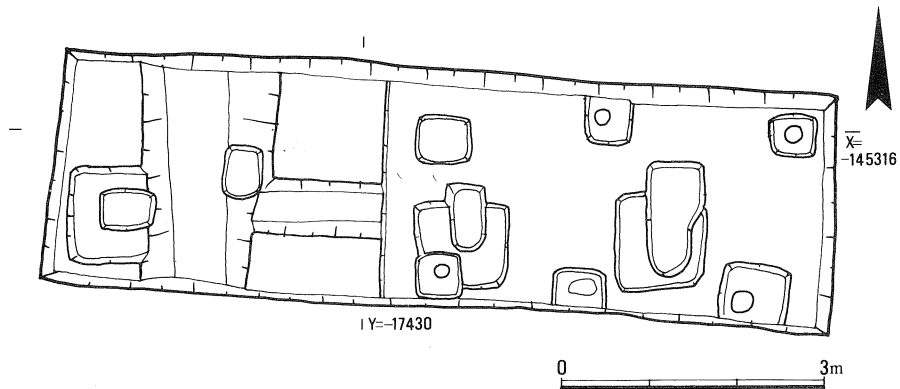
地土の可能性が強い。段の西側には暗灰色砂質土が堆積するが、これは後世の攪乱であろう。その下には地山上に暗褐色粘土が10cm強堆積しており、周濠内と考えられた。地山上面には掌大の石が数個散布しており、葺石が転落したものとおもわれる。

以上の結果は、昭和58年度の第151 - 28次調査後に作成した墳丘および周濠の復原案と矛盾するところはない。但し検出した部分はいずれも底に近い部分であり、元の墳形はひと回り小さい規模であったろう。なお、京条坊等に関する遺構は全く認められなかった。

住宅新築に伴なう事前調査である。調査地の土層は耕作土・床土・茶褐色土（遺物包含層）・灰褐色砂質土（整地層）・粘土地山で、耕作土面下約45cmの整地層上に上層の、地山面上に下層の遺構を検出した。遺構は、下層は規模はわからないが4棟の掘立柱建物と思われる柱穴群を検出した。上層は南北溝（幅1.5m、深さ0.6m）と、これに流入する東西小溝である。

この坪内では整地地業を伴なう敷地区画の変更が認められる。下層の建物は少なくとも2回の建替がある。下層の柱掘形の残存する深さは浅いために、上層の整地に際しては、切土をとまうかなり大掛りな造成が行なわれたらしく、平城京造営にかかわる工事であった可能性が大きい。上層では敷地内を分割する溝を設けて宅地を小区画化したものと思われる。

出土遺物は平城宮土器編年Ⅰ～Ⅱの土器が多く、大きな柱掘形埋土からは平城宮土器編年Ⅰの土器が出土している。したがってこの調査区の遺構の年代は、宮前から平城宮初期にかけての期間に限定される。



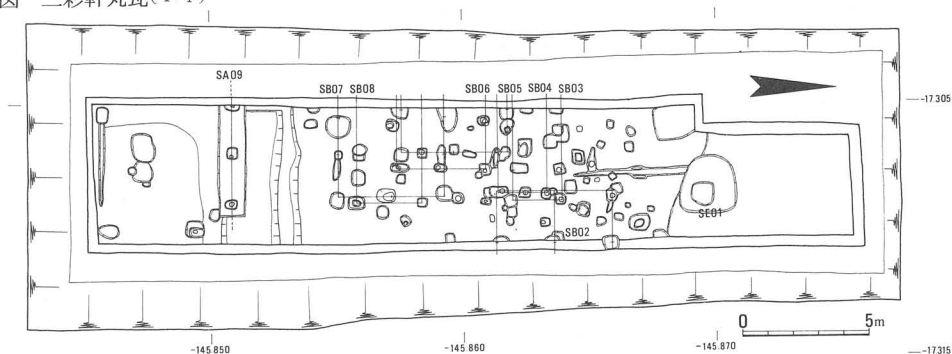
第27図 左京一条三坊三坪発掘遺構図

店舗建設に伴う事前調査である。周辺では左京二条三坊三坪（156-18次『昭和59年概報』）の調査があり、三坪と四坪の坪境小路北側溝や建物7棟を検出した。今回の調査地は三坪の東隣の坪にあたり、坪の利用状況を知る手掛かりや三坪と四坪の坪境小路北側溝の検出をめざして東西12m南北35mの調査区を設定した。旧耕土の上に約2mの造成した土が厚く、遺構検出面積は東西6m南北30mの約180㎡である。耕土から下の層位は耕土・床土・灰褐色粘質土・茶褐色砂・灰色粘土・暗褐色土の順である。遺構面は暗褐色土層上面である。検出した奈良時代の遺構は掘立柱建物7棟の一部、掘立柱塀1条、井戸1基である。建物はいずれも東西棟と考えられる。柱掘方が50~60cm、柱間寸法が7尺~8尺である点は京内の掘立柱建物の様相と一致する。SB07の北側柱で西から3つ目には、須恵器がまとまって埋まっていた。井戸SE01は隅に柱を立てる構造であることを確認したが縦板か横板かは不明である。井戸埋土から奈良時代後半の土器が出土し、墨書土器「天」が1点出土している。遺構面の暗褐色土は発掘区南端では砂層に変わり、この砂層は北西から南東に斜行するようで、旧河川と思われる。

出土遺物のなかに、三彩軒丸瓦1点、硯脚部2点、土馬1点がある。三彩軒丸瓦は、中房を欠く下半分で単弁八弁と考えられ、新形式である。弁の一部に褐釉、瓦当下部側面に緑色・褐色・白色の釉を交互に配する。



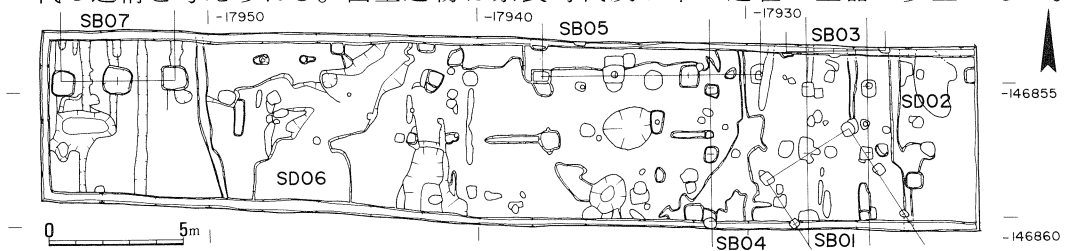
第28図 三彩軒丸瓦(1:4)



第29図 左京二条三坊六坪発掘遺構図(1:300)

ホテル建設に伴う事前調査である。当核地の北隣の敷地は第141－31次調査（『昭和57年概報』）によって掘立柱建物9棟他が検出され、奈良時代の一時期にはコ字形に正殿・脇殿を配する宅地であったと推定されている。

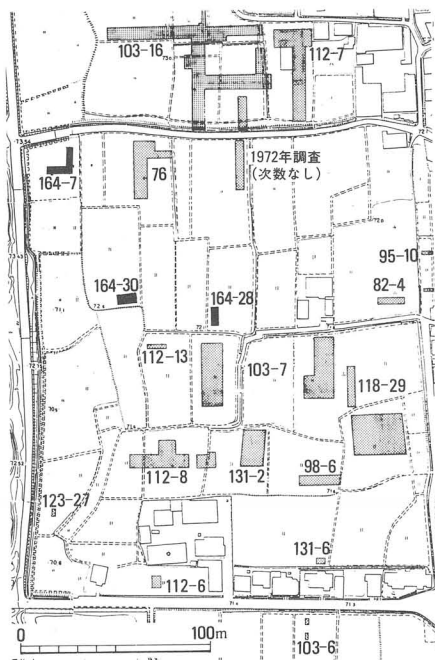
今回の調査区には旧水田面上に約1.5mの深さで盛土がなされている。旧水田耕土・床土を取り除くと、黄灰色粘質土の地山面に営まれた遺構が検出される。検出した遺構は掘立柱建物4棟、溝2条である。SD06は発掘区西部を北東から南西にやや蛇行しながら流れる流路で、灰褐色の砂が流路内に堆積している。埋土中に6世紀の土器が含まれ、平城京造営以前の流路で、第141－31次調査で検出したSD03の下流にあたると考えられる。SB01は桁行2間、梁間2間で、柱間が桁行1.95m（6.5尺）、梁間1.8m（6尺）となる。棟が北で30度余り西へ振れている。平城京造営以前の遺構であろうか。SB03は柱間2.4m（8尺）で2間分の掘立柱列である。南北棟建物の南妻と考えられる。SB04は南北に並ぶ3列の掘立柱列である。東列と中央列は2.1m（7尺）、中央列と西列は3.6m（12尺）の間隔があり、東に底のつく南北棟の建物と考えられる。桁行柱間は2.4m（8尺）、4間以上ある。SB05は柱間2.7m（9尺）で4間分の掘立柱列である。四面庇又は二面庇の南北棟建物の南妻と考えられる。SB07は柱間2.1m（7尺）で2間分の掘立柱列である。柱掘形は一辺1.0mあり発掘区内では最も大きい。建物の東南端部分と考えられる。以上の他に掘立柱掘形・南北溝がある。主な遺構の年代や前後関係の決め手はないが、発掘区内から8世紀代の土器が出土しており、SB01・SD06以外は奈良時代の遺構と考えられる。出土遺物は奈良時代及び中・近世の土器が少量である。



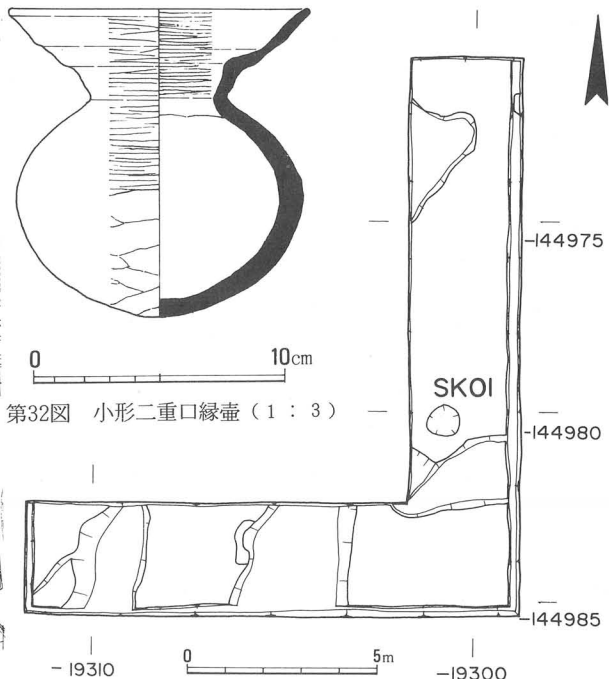
第30図 左京四条二坊三坪発掘遺構図

事務所建設に伴う事前調査である。調査地は右京一条二坊八坪の東北部に位置する。周辺では第103-7次（『昭和52年概報』）、第103-16次（『年報1978』）、第112-8次（『昭和53年概報』）等の調査が行なわれて京極大路、右京一条二坊の坪境小路、坪内の建物配置等が明らかになっている。

今回の発掘区は秋篠川右岸の道路沿いで、1m以上の盛土がある。盛土の下の耕土・床土を取り除くと遺物包含層に至るが、灰黄褐色又は灰茶褐色の粘質土の地山面は発掘区北端及び西端で床土直下に検出されるだけで、東南方へ向かって地山は下ってゆく。東西発掘区部分は深さ70cm程に暗灰色の粘質土が堆積し、なかに中・近世の土器・陶磁器片を含み、近世の攪乱と知る。南北発掘区内で検出した土壙SK01は地山面上に営まれ、北半部に奈良時代の整地土がかぶっている。SK01からは5世紀代の土師器小形丸底壺、小形二重口縁壺、高杯、甕が出土した。小壺は土壙底部に倒立して置かれ、SK01は何らかの祭祀の遺構かと考えられる。



第31図 右京一条二坊調査位置図  
(数字は調査回数 1 : 4000)



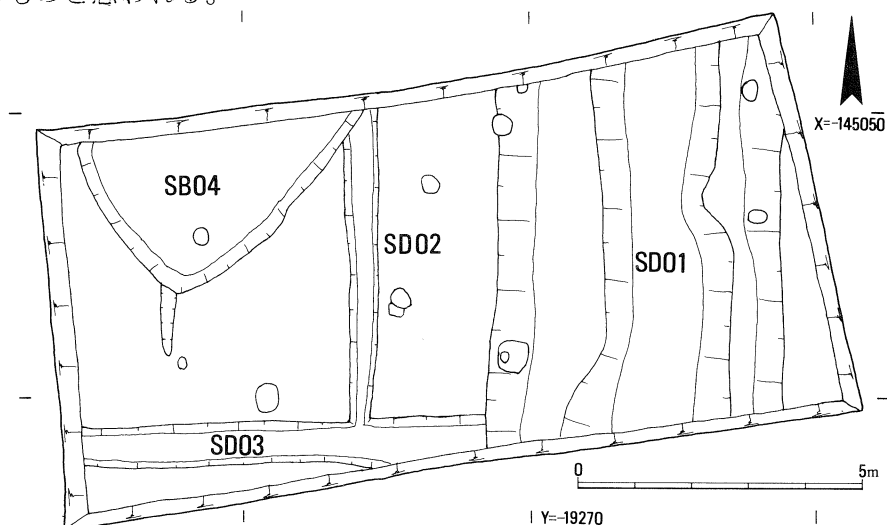
第32図 小形二重口縁壺 (1 : 3)

第33図 右京一条二坊八坪発掘遺構図 I (1 : 200)

駐車場造成に伴う事前調査である。調査地は右京一条二坊八坪の東南部に位置する。調査区の層序は、上から盛土（約40cm）・耕土（約30cm）・床土・遺物包含層となり、現地表下約90～100cmで遺構面にいたる。

検出した主な遺構は、南北溝2条、東西溝1条、竪穴住居跡1棟である。このうち南北溝SD01は幅5.0m、深さ0.5mを測り、溝幅が広いわりに浅い。ほぼ南北方向を指して流れ、溝底からは少量の瓦片が出土しているから、奈良時代ないし、それ以降のものである。昭和53年の第112-8次調査によると、本調査区南方で二坪・七坪の坪境小路の両側溝を確認しているが、その坪境小路を北へ延長して、一坪・八坪の坪境小路を推定すると、その西側溝が今回のSD01の東約10mに位置することになる。したがってSD01は坪境小路の側溝等ではないと考える。

調査区西北端で検出した竪穴住居跡SB04は平面規模は明らかにしえないが、深さは約50cmある。埋土上層には土師器が多量に含まれており、その量は整理箱10箱にのぼる。土師器の年代から、この竪穴住居跡は5世紀初頭頃のものとして推定できる。他の2条の溝（SD02・03）は、出土遺物等から考えてやはり古墳時代に遡るものと思われる。



第34図 右京一条二坊八坪発掘遺構図Ⅱ



## 7 右京八条一坊十三坪・十四坪の調査 第168次

本調査は大和郡山市北部清掃工場の周辺整備事業に伴う事前調査である。周辺では、1983年に十一坪で第149次調査（『平城京右京八条一坊十一坪』1984）が、1984年には十四坪で、第156—32次調査（『昭和59年概報』）と大和郡山市教育委員会による調査が行なわれている。今回は十三坪の北西から十四坪南西にかけての部分で2回にわけて調査した。調査地の標準的な層位は、上から、耕土、床土、灰褐色砂質土と暗灰色粘質土の互層（中世以降の河川による堆積土）、暗褐色土（古代～中世の遺物を含む包含層）、暗黄褐色粘質土（地山、遺構検出面）の順となる。2回にわたる調査で検出した遺構は掘立柱建物58棟、掘立柱塀16条、坪境小路1条、井戸10基、土器埋納遺構10基のほか、多数の土壙・溝があり複雑に重複している。以下十三坪の遺構、十四坪の遺構、遺物、まとめの順に記述する。なお第36図の発掘遺構図には、奈良時代前半（十三坪のⅠ期、十四坪のⅡ期）に属する掘立柱建物と井戸（網のかかった井戸）を明示した。

### 十三坪の遺構

大きく3時期に分けることができる。

Ⅰ期 この時期は、東を南北方向の道路で画し、坪の4分の1を一体とする地割で、最も整った建物配置をもつ。主屋は東西棟掘立柱建物（身舎5間×2間北庇付き）で、この北の東西に2棟の南北棟掘立柱建物をほぼ対称におき、コ字形配置とする。さらに主屋から南に離れて東西棟掘立柱建物（身舎3間×2間南庇付き）があり、西北に総柱掘立柱建物2棟と西辺に4棟の南北棟掘立柱建物がある。この時期には井戸2基を伴っている。

Ⅱ期 掘立柱塀及び南北溝によって先の4分の1町が4分割されて、16分の1町を単位とする4区画に変わる。主屋と副屋からなる2ないし3棟の建物と井戸1基が基本的な構成となる。

Ⅲ期 地割のための南北溝が廃され、8分の1町を単位とする横長の2区画となる。北半の区画は主屋・総柱建物、南半の区画は主屋・副屋・総柱建物からな

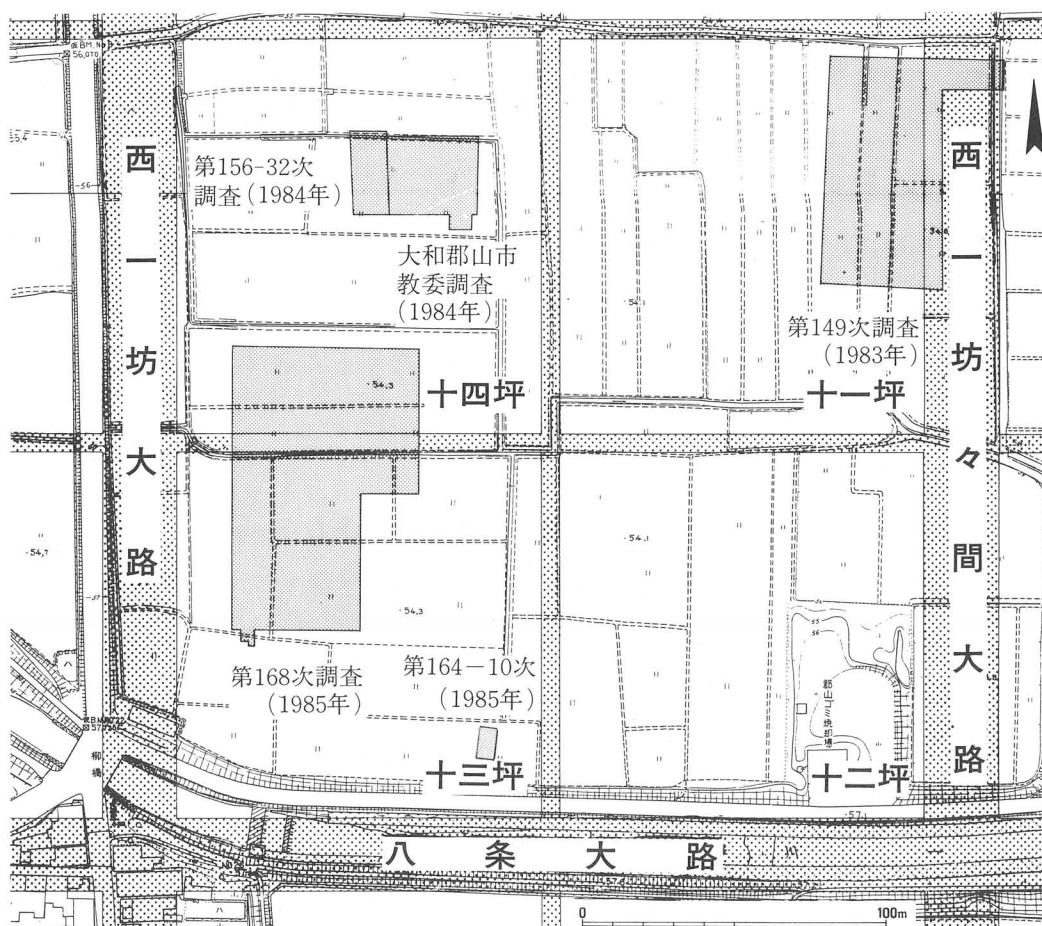
り、各々井戸が付属する。

これらの遺構の年代は、Ⅰ期が8世紀前半～中頃、Ⅱ期が8世紀中頃～後半、Ⅲ期が8世紀後半～末と考えられる。

#### 十四坪の遺構

大きく4期に分けることができる。

Ⅰ期 坪境小路と南北両側溝は2時期あり、Ⅰ期には古い小路が、Ⅱ期～Ⅳ期には新しい小路が対応する。坪境小路と十三坪・十四坪との間は、築地で区画される。十四坪は南北方向の築地によって東西に二分される。この築地の位置は、十三坪内を区画する南北方向の道路とほぼ同じ位置である。坪内には四棟の掘立



第35図 右京八条一坊調査位置図

柱建物が点在する。

Ⅱ期 区画施設が掘立柱塀にかわり、32分の1町という小規模な宅地となる。一つの宅地は、東西約27m、南北12～15mの東西に細長い。宅地内の西端に南北棟掘立柱建物一棟（4間×2間東庇付き）を建て、その東に井戸一基がある。

Ⅲ期 Ⅱ期と宅地割に大きな変化がなく宅地内の建物構成が若干変化する。東南の宅地では、東西棟掘立柱建物2棟が南北にならぶ構成となる。この建物群の西側に、2間×1間の小形掘立柱建物があり、建物内南寄りに朧衣壺を埋納した円形の土壇がある。この建物は規模や朧衣壺の存在から、産屋ではないかと考えられる。また西北の宅地では宅地が北へ広がり、東南の宅地と同じように東西棟掘立柱建物2棟が建つ。

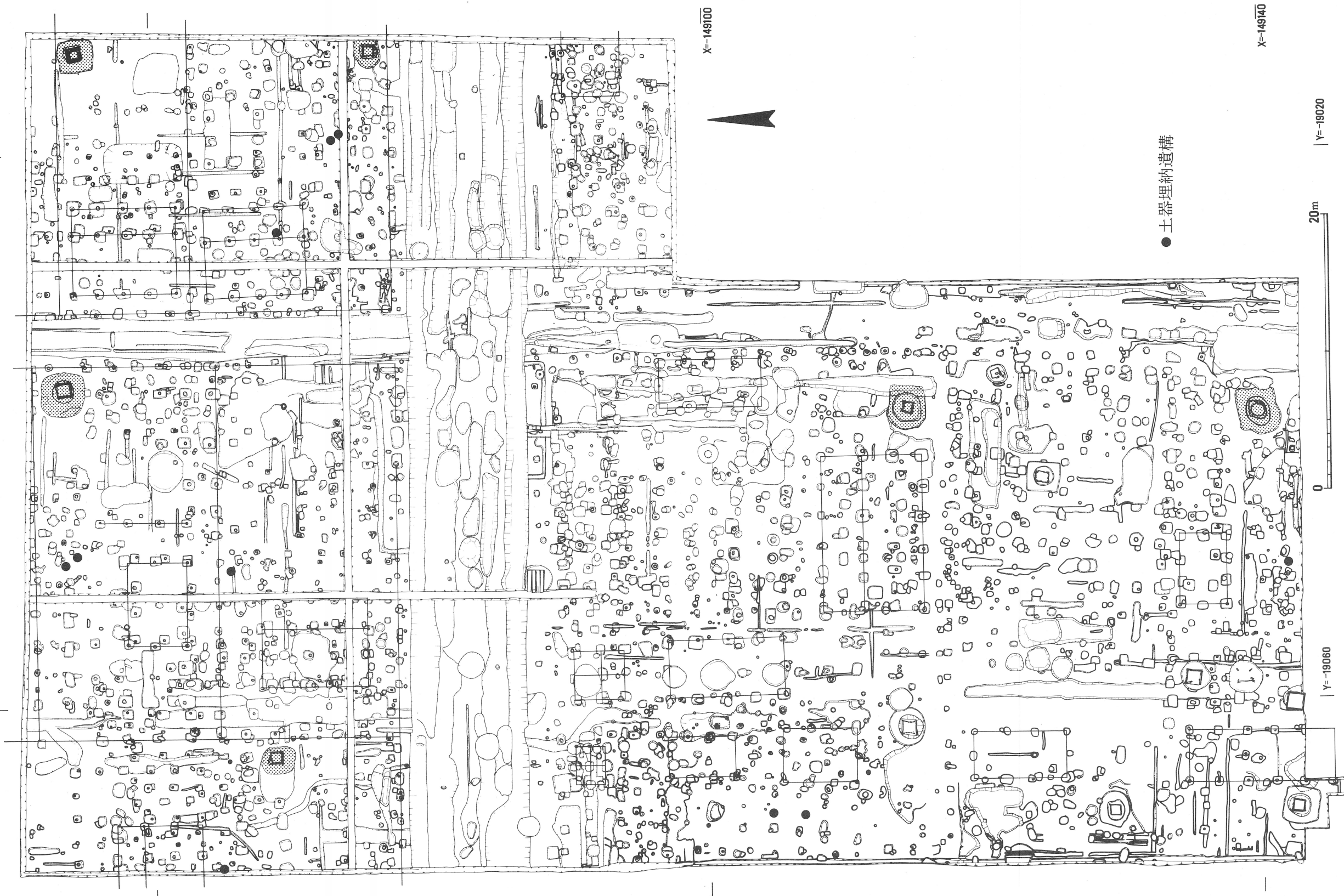
Ⅳ期 この時期には全体に建物密度が薄くなる。坪を東西に二分する区画施設が、二条の素掘溝を伴う道路にかわる。宅地内には南北棟掘立柱建物2棟が検出されるのみである。

これらの遺構の年代は、Ⅲ期の産屋とみられる掘立柱建物内から出土した朧衣壺が平城宮土器編年Ⅲのものであることから、遺構変遷のⅠ・Ⅱ期が奈良時代前半、Ⅲ期が奈良時代中頃、Ⅳ期が奈良時代後半と考えることができる。

## 遺 物

坪境小路両側溝・坪内を区画する溝・井戸などから多数の須恵器・土師器・瓦のほか斎串・曲物などの木製品、和同開珎・神功開寶・鉄釘などの金属製品、石帯・砥石などの石製品、土馬・フィゴ羽口・トリベなどの土製品が出土した。ここでは特異な遺物として注目される鉄鉗・海獣葡萄鏡・羊形硯・冠帽・富本銭と土器埋納遺構から出土した遺物についてのみ述べることにする。

鉄鉗 十三坪西南の縦板組井戸内から出土した。全長約40cm、鍛冶用具の一つで溶解した金属を入れたルツボ・トリベの取り上げなどに使用する。同じ井戸から出土した鉄匙・大型砥石とともに十三坪の金属器工房的な性格を示すものとして注目される。



● 土器埋納遺構

第366图 右京八条一坊十三・十四坪瓦插遺構图 (1 : 300)

海獣葡萄鏡 十三坪東南の円形削り抜き井戸内から出土した。鏡背内外区・外縁をふくむ小破片で、復原すると直径約12.5cmの中形鏡になる。内区に葡萄唐草文と海獣の脚部、外区には鳥形と葡萄唐草が配され、内外区は細い圏線で画される。外縁は直高縁でくり方をもつ。 casting 上がりがよく白銅色を呈する舶載鏡である。

羊形硯 坪境小路南側溝から出土した。左京四条四坊九坪につぐ二例目である。今回出土したものはやや小形で造形的には劣るものの、鼻梁・顔毛・角紋の表現が類似する。

冠帽 坪境小路南側溝から出土した。繊維を生漆で固めたのち、黒漆で固定したいわゆる漆紗冠であり、正倉院にも遺例がある。本例以外にも平城宮内裏外郭や、平城京左京八条三坊九坪坪境小路南側溝などからの出土例が知られる。

富本銭 十四坪東北の縦板組井戸内から出土した。直径2.47cm、重さ4.15gである。方孔の上下に「富」「本」の字を配し、左右に各々7個の珠文を置く。厭勝銭と呼ばれ、まじないに用いられたものと考えられる。

土器埋納遺構出土遺物 今回検出された10基の土器埋納遺構は出土遺物から大きく次の3種に分けることができる。

①土器だけを埋納するもの。土師器皿Cや甕Bを直径30~50cmの円形土壇に埋納するもの。皿はいずれも口縁部の一カ所に煤が付着している。

②土器と銭貨などを埋納するもの。十三坪では、径約15cmの円形土壇に土師器皿C4枚とともに和同開珎32枚以上、ガラス小玉6点以上、金箔片を納めていた。また十四坪では、同じく径40cmの円形土壇に土師器皿Cと金箔を納めていた。これらは銭貨や金箔の存在から、地鎮のための遺構と考えられる。

③胞衣壺 胞衣壺とは、後産（胞衣）を容器に入れて埋納し、子供の栄達や健やかな成長を願う産育習俗の一つである。古代末から中世にかけての文献に胞衣壺埋納のことが見え、男子の場合は銭貨と筆・墨を、女子の場合は銭貨と針・糸を埋納するものであったことが文献や民俗例からうかがえる（水野正好『想蒼籬記

壺叢』奈良大学紀要第13号 1984）。今回は、須恵器杯Bのなかから和同開珎5枚と墨が発見された。平城京内では、右京五条四坊三坪に次ぐ2例目である。

## まとめ

今回の調査では、5600㎡という広い面積を調査することができたため、坪内の宅地割や土地利用の様相を明らかにすることができた。十三坪では4分の1町→16分の1町→8分の1町という変遷をたどる。とくに16分の1町の宅地割は、正方形であって、従来知られる横長の宅地割（左京八条三坊九坪など）と異なる分割方式が明らかになった。Ⅰ期はコ字形配置の建物を中枢にして、多数の付属建物を伴っており、通常の宅地というよりは官衛的な色彩が強い。Ⅱ期・Ⅲ期については鉄鉗・フイゴ羽口・トリベ・砥石等の出土や、調査区全域に炭化物が多量に検出される状況からみて、金属工房及び、それに関わる者の宅地と考えられる。

十四坪では、Ⅱ期・Ⅲ期に32分の1町という小形の宅地割となっている。32分の1町宅地は、第166次調査（1985年）で初めて確認されたもので、今回は掘立柱塀によって区画される32分の1町宅地4区画を検出することができた。いずれも宅地内の西に南北棟掘立柱建物（身舎4間×2間東庇付き）が建ち、東に井戸1基があるという構成となる。十四坪は、32分の1町という小形の宅地割が見られることや、胞衣壺・産屋の存在などから、居住空間であったと考えられる。ただし、規格的な宅地割や建物構成など、一般の宅地と考えることに若干に疑問も残る。また、十四坪北半で行なわれた2回の調査では、漆付着土器・フイゴ羽口・トリベなどの土器が見られ、金属工房や、漆工房の存在が推定されている。十四坪の全体の性格については、未調査区における今後の調査成果に待ちたい。

遺物の上でも上記したような特異な遺物の出土が見られる。なかでも富本銭や土器埋納遺構など祭祀に関連した遺物の出土が注目される。また今回坪境小路側溝や坪内を区画する溝から243個を数える大量の土馬が出土している。十一坪の調査でも西一坊々間大路西側溝から、141点の土馬が出土しており、その機能とともに注目される点である。

今回の調査は右京における最も広い面積の調査として、上記した多くの成果をあげることができた。同時に問題点も多く、今後に予定される報告書の作成過程で十分に検討する必要がある。 参考文献 『奈良県観光』第351号 1986年